

化鳥

泉鏡花

青空文庫

おもしろ
愉快いな、愉快いな、お天氣が悪くつて外へ出て遊ばなくつても可いや、笠を着て、蓑を着て、雨の降るなかをびしよびしよ濡れながら、橋の上を渡つて行くのは猪だ。

すげがき
菅笠を目深に被つて、※に濡れまいと思つて 向風に俯向
いてるから顔も見えない、着ている蓑の裾が引摺つて長いから、
脚も見えないで歩行いて行く、脊の高さは五尺ばかりあるうかな、
猪、としては大なものよ、大方猪中の王様があんな三角形の冠
を被て、市へ出て来て、そして、私の母様の橋の上を通るの

であろう。

トこう思つて見ていると愉快おもしろい、愉快い、愉快い。

寒い日の朝、雨の降つてる時、私の小さな時分、何日いつかでしたっけ、窓から顔を出して見ていました。

「母おつかさん様、愉快おもしろいものが歩行あるいて行くよ。」

その時母様は私の手袋こしらを拵こしらえていて下すつて、

「そうかい、何が通りました。」

「あのウ猪。」

「そう。」といつて笑つていらつしやる。

「ありや猪だねえ、猪の王様だねえ。」

母おつかさん様。だつて、大いおおきんだもの、そして三角形なりの冠を被かてい

ました。そうだけれども、王様だけれども、雨が降るからねえ、
 びしよぬれになって、可かわいそう哀相だつたよ。」

母様は顔をあげて、こつちをお向きで、

「吹込みますから、お前もこつちへおいで、そんなにしていて、
 衣服きものが濡れますよ。」

「戸を閉めよう、母様、ね、ここん処とこの。」

「いいえ、そうしてあけておかないと、お客様が通つても橋銭を
 置いて行つてくれません。ずるいからね、引籠ひっこもつて誰も見てい
 ないと、そそくさ通抜けてしまいますもの。」

私はその時分は何にも知らないでいたけれども、母おっかさん様と二

人ぐらしは、この橋銭で立つて行つたので、一人前ひとりいくらかずつ

取つて渡しました。

橋のあつたのは、市まちを少し離れた処で、堤防どてに松の木が並んで植うわつていて、橋の袂たもとえのきに榎えのきが一本、時雨榎しぐれえのきとかいうのであつた。

この榎の下に、箱のような、小さな、番小屋を建てて、そこに母様と二人で住んでいたので、橋は粗造な、まるで、間に合せとといったような拵くえ方、杭くの上へ板を渡して竹を欄干にしたばかりのもので、それでも五人や十人ぐらい一いつ時ときに渡つたからツて、少し揺れはしようけれど、折れて落ちるような憂慮きづかいはないのであつた。

ちようど市まちの場末に住んでる日傭取ひようとり、土方、人足、それから、三味線さみせんを弾いたり、太鼓ならを鳴して飴あめを売つたりする者、越後獅子えちごじし

やら、猿ざるまわし 廻まわし やら、附木つけぎを売る者だの、唄を謡うものだの、元もと結つとよりだの、早附木の箱を内職にするものなんぞが、目貫めぬきの市まちへ出て行く往ゆ歸きかえりには、是非おつかさん母おつかさん様の橋を通らなければならぬないので、百人と二百人ずつ朝晩賑にぎやかな人通りがある。

それからまた向うから渡つて来て、この橋を越して場末きたなの穢きたない町を通り過ぎると、野原へ出る。そことこん処は梅林で、上の山が桜の名所で、その下に桃谷というのがあつて、谷間たにあいの小流こながれには、菖蒲あやめ、燕子花かきつばたが一杯咲く。頬白ほおしろ、山雀やまがら、雲雀ひばりなどが、ばらばらになつて唄っているから、綺麗きれな着物を着た間屋むすめの女だの、金満家かねもちの隠居ひきこだの、瓢ひきこを腰へ提げたり、花の枝をかついだりして千鳥足ちどりあしで通るのがある。それは春のことで。夏になると納涼なすずみだと

いつて人が出る。秋は蕘狩たけがりに出懸けて来る、遊山ゆざんをするのが、皆内みんなの橋を通らねばならない。

この間も誰かと二三人づれで、学校のお師匠さんが、内の前を通つて、私の顔を見たから、丁寧にお辞儀をすると、おや、といったきりで、橋銭を置かないで行つてしまった。

「ねえ、母おつかさん様、先生もずるい人なんかねえ。」
と窓から顔を引込ひっこませた。

二

「お心易こころやすだて立たんでしよう、でもずるいんだよ。よつぽどそう

いおうかと思つたけれど、先生だというから、また、そんなことで悪く取つて、お前が憎まれてもしちやなるまいと思つて、黙つていました。」

と、いいいい 母 おつかさん 様は縫つていらつしやる。

お膝の上に落ちていた、一ツの方の手袋の、かつこう 恰好が出来たのを、私は手に取つて、てのひら 掌にあててみたり、甲の上へ乗ツけてみたり、

「母 おつかさん 様、先生はね、それでなくつても僕のことを可愛がつちやあ下さらないの。」

と訴えるようにいいました。

こういつた時に、学校で何だか知らないけれど、私がものをい

つても、快く返事をおしでなかつたり、拗すねたような、けんどんなような、おもしろくない言ことばをおかけであるのを、いつでも情なさけなないと思い思いしていたのを考え出して、少し鬱ふさいで来て俯うつむ向むいた。「なぜさ。」

何、そういう様子に見えるのは、つい四五日前からで、その前まへにはちつともこんなことはありはしなかつた。帰かえつて母おつかさん様さまにそういつて、なぜだか聞いてみようと思おもつたんだ。

けれど、番小屋へ入ると直すぐ飛出として遊あそんであるいて、帰ると、御飯ごはんを食たべて、そしちやあ横よこになつて、母様の気高い美しい、頼た母はなしい、穏当おだやかな、そして少し瘦やせておいでの、髪かみを束たねてしつとりしていらつしやる顔かほを見て、何か談話はなしをしいしい、ぱつちりと

眼をあいてるつもりなのが、いつか、そのまんまで寝てしまつて、眼がさめると、また直支度すぐを済すまして、学校へ行くゆんだもの。そんなこといつてる隙ひまがなかつたのが、雨で閉籠とじこもつて、淋しいので思い出した、ついでだから聞いたので。

「なぜだつて、何なの、この間ねえ、先生が修身のお談話はなしをしてね、人は何だから、世の中に一番えらいものだつて、そういつたの。母おっかさん様、違つてるわねえ。」

「むむ。」

「ねツ違つてるワ、母様。」

と揉もみくちやにしたので、吃驚びつくりして、ぴつたり手について畳の上で、手袋をのした。横に皺しわが寄つたから、引張ひっぱつて、

「だから僕、そういつたんだ、いいえ、あの、先生、そうではないの。人も、猫も、犬も、それから熊も、皆みんなおんなじ動物けだものだつて。」

「何とおっしゃったね。」

「馬鹿なことをおっしゃいって。」

「そうでしよう。それから、」

「それから、(だって、犬や、猫が、口を利きますか、ものをいいますか)ツて、そういうの。いいます。雀すずめだってチツチツチツチツて、母おつかさん様と、父おとっさん様と、児こどもと朋ともだち達みんなと皆みなで、お談はなし話をはなししてゐるじゃありませんか。僕眠い時、うつとりしてゐる時なんぞは、耳みみ処ところに来て、チツチツチて、何かいつて聞かせますのツて

そういうとね、（詰つまらない、そりや囀せえずるんです。ものをいうのじやあなくツて囀せえずるの、だから何をいうんだか分りますまい）ツて聞いたよ。僕ね、あのウだつてもね、先生、人だつて、大勢で、皆みんなが体操場で、てんでに何かいつてるのを遠くとこン処で聞いていると、何をいつてるのかちつとも分らないで、ざあざあツて流れてる川の音とおんなしで、僕分りませんもの。それから僕の内の橋の下を、あのウ舟漕こいで行くゆのが何だか唄うたつて行くゆけれど、何をいうんだかやつぱり鳥が声を大きくして長く引ひばつて鳴ないでるのと違ちがいませんもの。ずツと川下の方で、ほうほうツて呼よんでるのは、あれは、あの、人なんか、犬なんか、分りませんもの。雀すずめだつて、四十雀しじゆうからだつて、軒のきだの、榎えんだのに留とまつてないで、僕と一

所に坐つて話したら皆分るみんなんだけれど、離れてるから聞えませんがの。だって、ソツとそばへ行つて、僕、お談話しようと思うと、皆立つていってしましますもの、でも、いまに大人になると、遠くで居ても分りますツて。小さい耳だから、沢山いろんな声が入らないのだって、母様が僕、あかさんであつた時分からいいました。犬も猫も人間もおんなじだって。ねえ、母様、だねえ母様、いまに皆分るんだね。」

おつかさん
母様は莞爾なすつて、

「ああ、それで何かい、先生が腹をお立ちのかい。」

そればかりではなかつた、私の兇心こどもごころにも、アレ先生が嫌な顔をしたな、トこう思つて取つたのは、まだモ少し種々いろんなことをいいあつてから、それから後の事で。

はじめは先生も笑いながら、ま、あなたがそう思つているのなら、しばらくそうしておきましょう。けれども人間には智慧ちえというものがあつて、これには他の鳥ほかだの、獣けだものだのという動物が企て及ばないということ、私が河岸に住まつているからつて、例をあげておさとしてあつた。

釣つりをする、網を打つ、鳥をさす、皆人みんなの智慧で、何も知らない、

分らないから、つられて、刺されて、たべられてしまうのだトこ
ういうことだった。そんなことは私聞かないで知っている、朝晩
見ているもの。

橋を挟んで、川を遡さかのぼつたり、流れたりして、流ながれ網あみをかけて
魚うおを取るのが、川かわ中に手て拱あぐらかいて、ぶるぶるふるえて突立つ立たつ
てるうちは、顔のある人間だけれど、そらと行って水に潜ると、
逆さかさになつて、水みず潜くぐりをしいしい五分間ばかりも泳いでいる、足
ばかりが見える。その足の恰かっこう好こうの悪さといつたらない。うつく
しい、金魚の泳いでる尾おひれ鰭りの姿や、ぴらぴらと水銀色を輝かして
跳ねてあがる鮎あゆなんぞの立派さにはまるでくらべものになるのじ
やあない。そうしてあんな、水みず浸びたしになつて、大川の中から足

を出してる、こんな人間がありますものか。で、人間だと思おうとおかしいけれど、川ン中から足が生えたのだと、そう思つて見ているとおもしろくツて、ちつとも嫌なことはないのです、つまらない観世物みせものを見に行くゆより、ずっとまし、なのだつて、母様がそうお謂いいだから、私はそう思つていますもの。

それから、釣をしますのは、ね、先生、とまたその時先生にそういいました。あれは人間じゃあない、蕈きのこなんで、御覧なさい。片手懐ふところつて、ぬうと立つて、笠を被かぶつてる姿というものは、堤防どての上に一本占治茸ほんしめじが生えたのに違いませぬ。

夕方になつて、ひよろ長い影がさして、薄暗い鼠色の立姿にでもなると、ますます占治茸で、ずっと遠い遠い処まで一ならびに、

十人も三十人も、小さいのだの、大きいのだの、短いのだの、長いのだの、一番橋手前のを頭かしらにして、さかり時は毎日五六十本も出来るので、またあっちこっちに五六人ずつも一ひとかたまり団だんになつてゐるのは、千本しめじツて、くさくさに生えている、それは小さいのだ。木だの、草だのだと、風が吹くと動くんだけれど、蕈たけのこだから、あの、蕈だからゆつさりとしもしませぬ。これが智慧があつて釣をする人間で、ちつとも動かない。その間に魚うおは皆みんなで悠悠と泳いであるいていますわ。

また智慧があるつても、口を利かれないから鳥とくらべツこすりや、五分々々のがある、それは鳥さしで。

いつかじゅう
過 日 見たことがあります。

余所のおじさんの鳥さしが来て、私よそン処とこの橋つめの詰つめで、榎の下で
 立留たどまつて、六本めの枝のさきに可愛い頬ほ白おしろが居たのを、棹さおで
 もつてねらつたから、あらあらツてそういつたら、叱しツ、黙もつて、
 黙もつて。恐こわい顔をして私を睨ねめたから、あとじさりをして、そツ
 と見ていると、呼吸いきもしないで、じつとして、石のように黙もつて
 しまつて、こすえみう据身すえみになつて、中空を貫くように、じりつと棹を
 のぼして、覗ねらつてるのに、頬白は何にも知らないで、チ、チ、チ
 ツチツてツて、おもしろそうに、何かいつてしやべつていました。
 それをとうとう突ついてさして取ると、棹のさきで、くるくると舞
 つて、まだ烈はげしく声を出して鳴ないでるのに、智慧のある小父さん
 の鳥さしは、黙もつて、鱒どじょうづかみ 掴つかにして、腰の袋ねじン中へ捻ねじり込こん

で、それでもまだ黙って、ものもいわないで、のっそり去つちま
つたことがあつたんで。

四

頬白は智慧ちえのある鳥さしにとられたけれど、囁さえずってましたもの。
ものをいっていましたもの。おじさんは黙だんまりで、傍そばに見ていた私
までものを言うことが出来なかつたんだもの。何もくらべっこし
て、どつちがえらいとも分りはしないって。

何でもそんなことをいったんで、ほんとうに私そう思っていま

したから。

でも、それを先生が怒ったんではなかったらしい。

で、まだまだいろんなことをいって、人間が、鳥や獣けだものよりえら

いものだとそういっておさとしてであったけれど、海の中だの、山

奥だの、私の知らない、分らない処たとえのことばかり譬たとえに引いていう

んだから、口くちごたえ答は出来なかつたけれど、ちつともなるほどと

思われるようなことはなかつた。

だって、私、母おつかさん様のおつしやること、虚言うそだと思いません

もの。私の母様がうそをいって聞かせますものか。

先生は同おなじ一組クラスの小児達こどもを三十人も四十人も一人で可愛がろう

とするんだし、母様は私一人可愛いんだから、どうして、先生の

いうことは私を欺す^{だま}んでも、母様がいつてお聞かせのは、決して違つたことではない、トそう思つてるのに、先生のは、まるで母様のと違つたことというんだから心服はされないじゃありませんか。私が領^{うなず}かないので、先生がまた、それでは、皆^{みんな}あなたの思つてる通りしておきましょう。けれども木だの、草だのよりも、人間が立ち優^{まさ}つた、立派なものであるということ、いかな、あなたにでも分りましょう、まずそれを基礎^{どだい}にして、お談^{はなし}話をしようからつて、聞きました。

分らない、私そうは思わなかつた。

「あのウ母^{おつかさん}様（だつて、先生、先生より花の方がうつくしゅうございます）ツてそう謂^いつたの。僕、ほんとうにそう思つたの、

お庭にね、ちようど菊の花の咲いてるのが見えたから。」

先生は束髪に結った、色の黒い、なりの低い巖乗がんじょうな、でくふとでくおんな肥った婦人の方で、私がそういうと顔を赤うした。それから急にツツケンドンなものいいおしだから、大方それが腹をお立ちの原因であろうと思う。

「母様、それで怒ったの、そうなの。」

母様は合がってん点々をなすつて、

「おお、そんなことを坊や、お前いいましたか。そりやお道理だ。」

といつて笑顔をなすつたが、これは私の悪いたずら戯をして、母様の

おっしやること肯きかない時、ちつとも叱ぢらないで、恐い顔かほしないで、莞爾にっこり笑つてお見せの、それとかわらなかつた。

「そうだ。先生の怒つたのはそれに違ちがいない。

「だつて、虚言うそをいっちやあなりませんつて、そういつでも先生はいう癖くせになあ。ほんとうに僕、花の方がきれいだと思おもうもの。ね、母様、あのお邸やしきの坊ちゃんやんの、青だの、紫まじだの交まじつた、着物より、花の方がうつくしいつて、そういうのね。だもの、先生なんざ。」

「あれ、だつてもね、そんなこと人の前まへでいうのではありません。お前まへと、母様のほかには、こんないいこと知しつてるものはないのだから。分わらない人にそんなこというと、怒おこられますよ。ただ、

ねえ、そう思っていれば可いのだから、いつてはなりませんよ。可
いかい。そして先生が腹を立つてお憎みだつて、そういうけれど、
何そんなことがありますものか。それは皆みんなお前がそう思うからで、
あの、雀だつて餌えを与やつて、拾つてるのを見て、嬉しそうだと思
えば嬉しそうだし、頬白がおじさんにさされた時悲しい声と思つ
て見れば、ひいひいいつて鳴いたように聞えたじゃないか。

それでも先生が恐い顔をしておいでなら、そんなものは見てい
ないで、今お前がいった、そのうつくしい菊の花を見ていたら可
いでしよう。ね、そして何かい、学校のお庭に咲いてるのかい。」

「ああ沢山。」

「じゃあその菊を見ようと思つて学校へおいで。花はね、ものを

いわないから耳に聞えないでも、そのかわり眼にはうつくしいよ。
「

モひとつ不平なのはお天氣の悪いことで、戸外には、なかなか雨がやみそうにもない。

五

また顔を出して窓から川を見た。さつきは雨脚あめあしが繁しげくつて、まるで、薄墨はくすみで刷はいたよう、堤防どてだの、石垣いしがきだの、蛇籠じやかごだの、中洲なかせに草の生えた処ところだのが、点ぽつちり々ぽつちり、あちらこちらに黒くろずんでいて、それで湿しめつぽくつて、暗くらかったから見えなかったが、

少し晴れて来たから、ものの濡れたのが皆見える。

遠くの方に堤防の下の石垣の中ほどに、置物のようになって、
畏つて、猿が居る。

この猿は、誰が持主というのでもない。細引の麻縄で棒杭
に結えつけてあるので、あの、湿地茸が、腰弁当の握飯を半分
与つたり、坊ちゃんだの、乳母だのが、袂の菓子を分けて与つた
り、紅あかい着物を着ている、みいちゃんの紅べに雀すずめだの、青い羽織
を着ている吉公きちこうの目白だの、それからお邸やしきのかなりやの姫様ひいさん
なんぞが、皆みんなで、からかいに行つては、花を持たせる、手拭てぬぐいを
被かぶせる、水鉄砲あびを浴あびせるといふ、好きな玩弄物おもちゃにして、そのかわ
り何でもたべるものを分けてやるので、誰たれといつて、きまつて世

話をする、飼主はないのだけれど、猿の餓えることはありはしなかつた。

時々悪戯いたずらをして、その紅雀あたまたの天窗あたまの毛むしを撈むしったり、かなりやを引搔ひっかいたりすることがあるので、あの猿松が居ては、うっかり可愛らしい小鳥を手放てばなしにして戸外おもてへ出してはおけない、誰か見張みつてでもないないと、危険けんのおんだからつて、ちよいちよい繩を解いて放してやったことが幾度もあつた。

放はなすが疾はやいか、猿は方々かたを駈かけずり廻まわつて勝手放題かたな道楽だくをする。夜中に月が明あかるい時、寺の門を叩たたいたこともあつたそうだし、人の庖厨くりやへ忍しのび込んで、鍋なべの大おおきのと飯櫃めしびつを大屋根へ持つて、あがつて、手摺てづかみで食べたこともあつたそうだし、ひらひらと青いな

かから紅い切きれのこぼれている、うつくしい鳥の袂ひつばを引張ひつて、遙はるかに見える山ゆびさを指ゆびさして気絶きぜつしたこともあつたそうなり、私の覚え
 てからも一度誰かが、縄を切つてやつたことがあつた。その時は
 この時しぐれえのき雨しぐれえのき榎えのきの枝の両股りょうこになつてゐる処ところに、仰あおもむけ向むに寝転ねまんでいて、
 烏あしつかまの脛あしつかまを捕とえた。それから畚びくに入れてある、あのしめじ蕈たけが釣つつ
 た、沙魚はぜをぶちまけて、散々さんざ悪巫わるふざけ山戯さんざをした挙句あげくが、橋はしの詰つめの浮う
 世床よこのおじさんに掴つかまつて、額ぬかの毛けを真ま四角しかくに鋏はさまれた、それ
 で堪忍かんにんをして追おっばな放はなしたんだそうなのに、夜が明けて見ると、ま
 た平時いづもの処ところに棒杭ぼうかきにちやんと結むすべてあつた。蛇籠へびかごの上うへの、石垣いしがきの
 中なかほどで、上うへの堤防どてには柳やなぎの切株きしずがある処ところ。

またはじまつた、この通りに猿さるをつかまえてここへ縛むすつとくの

は誰だろう誰だろうツて一しきり騒いだのを私は知っている。

で、この猿には出処がある。

それは母おっかさん様が御存じで、私にお話しなすつた。

八九年前のこと、私がまだ母様のお腹なかん中に小さくなっていた時分なんで、正月、春のはじめのことであつた。

今はただ広い世の中に母様と、やがて、私のものといつたら、この番小屋と仮橋の他ほかにはないが、その時分はこの橋ほどのものは、邸の庭の中の一ツの眺望ながめに過ぎないのであつたそうで。今、市まちの人が春、夏、秋、冬、遊山に来る、桜山も、桃谷も、あの梅林も、菖蒲あやめの池も皆みんな父おとつさん様ようので、頬白だの、目白だの、山雀やまがらだのが、この窓から堤防どての岸や、柳ももの下や、蛇籠の上に居るのが

見える、その身体からだの色ばかりがそれである、小鳥ではない、ほんとうの可愛らしい、うつくしいのがちようどこんな工合に朱塗しゆぬりの欄干のついた二階の窓から見えたそうである。今日はまだお言いでないが、こういう雨の降って淋さみしい時などは、その時分ころのことをいつでもいってお聞かせだ。

六

今ではそんな楽しい、うつくしい、花園がないかわり、前に橋銭を受取るせざる筈はずの置いてある、この小さな窓から風がわりな猪いのだの、希代きよな蕈きのこだの、不思議な猿だの、まだその他に人の顔をした鳥だ

の、獣だのが、いくらでも見えるから、ちつとは思おも出いでになると
いっちゃあ、アノ笑顔をおしなので、私もそう思つて見るせいか、
人があるいて行く時ゆ、片足をあげた処は一本脚の鳥のようでおも
しろい。人の笑うのを見ると獣けだものが大きな赤い口をあげたよと思つ
ておもしろい。みいちゃんがものをいうと、おや小鳥せえすが囁ささるか
そう思つておかしいのだ。で、何でも、おもしろくツて、おかし
くツて、吹出さずには居られない。

だけれど今しがたも母おつかさん様さんがおいしいの通り、こんないいこと
を知ってるのは、母様と私ばかりで、どうして、みいちゃんだの、
吉公だの、それから学校の女の先生なんぞに教えたつて分るもの
か。

人に踏まれたり、蹴けられたり、後足で砂をかけられたり、苛いじめられて責さいまれて、煮湯にえゆを飲ませられて、砂あびを浴せられて、鞭むちうたれて、朝から晩まで泣通しで、咽喉のどがかれて、血を吐いて、消えてしまいそうになつてゐる処を、人に高見で見物されて、おもしろがられて、笑われて、慰なぐさみにされて、嬉しがられて、眼が血走つて、髪が動いて、唇が破れた処で、口惜くやしい、口惜しい、口惜しい、口惜しい、蓄生けだものめ、獣けだものめと始終そう思つて、五年も八年も経たたなければ、ほんとうに分ることはない、覚えられることはないんだそうで、お亡なくんなすつた、父おとつさん様とこの母様とが聞いても身み震ふるがするような、そういう酷ひどいめに、苦しい、痛い、苦しい、辛い、惨酷なめに逢つて、そうしてようようお分りになつたのを、

すっかり私に教えて下すつたので、私はただ母ちゃん母ちゃんて
ツて母様の肩をつかまえたり、膝にのつかつたり、針箱の引出ひきだし
を交まじぜかえしたり、物さしをまわしてみたり、裁縫おしごとの衣服きものを天
窓たまから被かぶつてみたり、叱なられて遁にげ出したりして、それでち
やんと教えて頂いて、それをば覚えて分つてから、何でも、鳥だ
の、けだもの獣だの、草だの、木だの、虫だの、蕈たけのこだのに人が見えるのだ
から、こんなおもしろい、結構なことはない。しかし私にこうい
ういいことを教えて下すつた母様は、とそう思う時は鬱ふさぎました。
これはちつともおもしろくなくつて悲しかった、勿体ない、とそ
う思つた。

だって母様がおろそかに聞いてはなりません。私がそれほどの

おもい思をしてようようお前に教えらるるようになったんだから、うかつに聞いていては罰があたります。人間も、鳥獣も草木も、昆虫類も、皆形こそ変つていてもおんなじほどのものだということをとこうおっしゃるんだから。私はいつも手をつけて聞きました。で、はじめの内はどうしても人が、鳥や、獣とは思われなくて、優しくされれば嬉しかった、叱られると恐かった、泣いてると可哀相だった、そしていろんなことを思った。そのたびにそういつて母様にきいてみると何、皆鳥が囀つてるんだの、犬が吠えるんだの、あの、猿が齒を剥くんだの、木が身ぶるいをするんだのとちつとも違つたことはないつて、そうおっしゃるけれど、やつぱりそうばかりは思われなくて、いじめられて泣いたり、撫でられ

て嬉しかったりしいしいしたのを、その都度母様に教えられて、今じゃあモウ何とも思っていない。

そしてまだああ濡れては寒いだろう、冷たいだろうと、さきのように雨に濡れてびしょびしょ行くのを見ると気の毒だったり、釣つりをしている人がおもしろそうだとそう思ったりなんぞしたのが、この節じやもう、ただ、変な輩だ、妙な猪だと、おかしいばかりである、おもしろいばかりである、つまらないばかりである、見ツともないばかりである、馬鹿々々しいばかりである、それからみいちゃんのようなのは可愛らしいのである、吉公のようなのはうつくしいのである、けれどもそれは紅雀がうつくしいのと、目白が可愛らしいのとちつとも違いはせぬので、うつくしい、可愛

らしい。うつくしい、可愛らしい。

七

また憎らしいのがある、腹立たしいのも他ほかにあるけれども、それも一場合あるに猿が憎らしかったり、鳥が腹立たしかったりするのとかわりは無いので。詮ずれば皆おかしければかり、やっぱり噴飯ふきだ材料すたねなんで、別に取留めたことがありはしなかつた。

で、つまり情を動かされて、悲かなしむ、愁うれうる、楽たのしむ、喜よぶなどいうことは、時に因り場合においての母おっかさん様ばかりなので。余所よそのものはどうであろうとちつとも心には懸けないように日ましに

そうなつて来た。しかしこういう心になるまでには、私を教えるために、毎日、毎晩、見る者、聞くものについて、母様がどんなに苦勞をなすつて、丁寧に深切に、飽かないで、熱心に、懇ねんごろに嘯かんで含めるようになすつたかも知れはしない。だもの、どうして学校の先生をはじめ、余所のものが少々ぐらいのことで、分るものか、誰だつて分りやしません。

ところが、母様と私とのほか知らないことを、モ一人他ほかに知つてるものがあるそうで、始終母様がいつてお聞かせの、それはあすこに置物のように畏かしこまつている、あの猿——あの猿もとの旧の飼主であつた——老父じいさんの猿さる廻まわだといひます。

さつき私がいつた、猿に出処があるというのはこのことで。

まだ私が母様のお腹なかに居た時分だツて、面白いいましたつけ。
 初卯はつうの日、母様が腰元を二人連れて、市まちの卯辰うたつの方の天神様へ
 お参まゐりなすつて、晩方帰つていらつしやつた。ちようど川向うの、
 いま猿の居る処で、堤防どての上のあの柳の切株に腰をかけて猿のひ
 かえ綱を握つたなり、俯向うつむいて、小さくなつて、肩で呼吸いきをして
 いたのがその猿廻まわのじいさんであつた。

大方今の紅雀べにすずめのその姉さんだの、頼白たのしろのその兄さんだのであつ
 たらうと思おもわれる。男だの、女だの、七八人寄つて、たかつて、
 猿さるにからかつて、きやあきやあいわせて、わあわあ笑つて、手を
 拍うつて、喝采かつさいして、おもしろがつて、おかしがつて、散々さんざん慰なぐさん
 で、そら菓子みかんをやるワ、蜜柑みかんを投げろ、餅もちをたべさすわつて、皆みんな

でどつさり猿に御馳走ごちそうをして、暗くなるとどやどやいつちまったんだ。で、じいさんをいたわってやったものは、ただの一人にんもなかつたといひます。

あわれだと思ひなすつて、母様がお銭あしを恵んで、肩掛シヨオルを着せておやんなすつたら、じいさん涙を落して拜んで喜びましたつて、そうして、

(ああ、奥様わたくはだもの、私は獣ななかまになりとうございます。あいら、皆畜生みんなで、この猿めが夥間ななかまでござりましょう。それで、手前達の同類にものをくわせながら、人間一疋びきわたくしの私には目を懸けぬのでござります。)

とそういつてあたりを睨にらんだ、恐らくこのじいさんなら分るであらう、いや、分るまでもない、人が獣けだものであることをいわないでも

知つていようと、そういつて、母様がお聞かせなすつた。

うまいこと知つてるな、じいさん。じいさんと母様と私と三人だ。その時じいさんがそのまんまでひかえづな控綱をそことこん処のぼうぐい棒杭に縛りツ放しにして猿をうちやつて行ゆこうとしたので、供の女中が口を出して、どうするつもりだつて聞いた。母様もまたそば傍からまあ棄すて兒ごにしては可哀相でないかツて、お聞きなすつたら、じいさんにやにやと笑つたそうで、

(はい、いえ、大丈夫でござります。人間をこうやつといたら、餓うえも凍こえもしようけれど、けだもの獣でござりますから今に長い目で御ご覧らんじまし、此こ奴いつはもう決してひもじい目に逢うことはござりませぬから。)

とそういつて、かさねがさね恩を謝して、分れてどこへか行つちまいましたツて。

果して猿は餓えないでいる。もう今ではよつぽどの年紀としであろう。すりや、猿のじいさんだ。道理で、功を経た、ものの分つたような、そして生まじめで、けろりとした、妙な顔をしているんだ。見える見える、雨の中にちよこなんと坐っているのが手に取るように窓から見えるワ。

八

朝晩見馴みなれて珍しくもない猿だけれど、いまこんなこと考え出

して、いろんなこと思つて見ると、また殊にもものなつかしい。あのおかしな顔早くいつて見たいなど、そう思つて、窓に手をついてのびあがつて、ずっと肩まで出すと※^{しぶき}がかかつて、眼のふちがひやりとして、冷たい風が頬を撫^なでた。

その時仮橋ががたがたいつて、川^{かわ}面^{づら}の小^こ糠^{ぬか}雨^{あめ}を掬^{すく}うように吹き乱すと、流^{ながれ}が黒くなつて颯^{さつ}と出た。といつしよに向岸から橋を渡つて来る、洋服を着た男がある。

橋板がまた、がツたりがツたりいつて、次第に近づいて来る、鼠色^{ねずみいろ}の洋服で、釦^{ぼたん}をはずして、胸を開けて、けばけばしゆう襟^{えり}飾^{ざり}を出した、でつぷり紳士で、胸が小さくツて、下^{した}腹^{はら}の方^{かた}が図ぬけにはずんでふくれた、脚の短い、靴の大きな、帽子の高

い、顔の長い、鼻の赤い、それは寒いからだ。そして大跨おおまたに、その逞たくましい靴を片足ずつ、やりちがえにあげちやあ歩行あはるいて来る。靴の裏の赤いのがぼつかり、ぼつかりと一ツずつこつちから見えるけれど、自分じゃあ、その爪つまさきも分りはしまい。何でもあんなに腹のふくれた人は、臍へそから下、膝から上は見たことがないのだと素晴らしいです。あら！ あら！ 短服チョッキに靴を穿はいたものが転がって来ると、思つて、じつと見ていると、橋のまんなかあたりへ来て鼻目金はなめがねをはずした、※がかかつて曇つたと見える。で、衣兜かぶしから手巾ハンケチを出して、拭ふきにかかったが、蝙蝠傘こうもりがさを片手に持っていたから手を空けようとして咽喉のどと肩のあいだへ柄を挟んで、うつむいて、珠たまを拭ぬぐいかけた。

これは今までに幾度たびも私見たことのある人で、何でも小児こどもの時
は物見高いから、そら、婆さんが転んだ、花が咲いた、といつて
五六人だかりのすることが眼の及ぶ処にあれば、必ず立つて見
るが、どこに因らず、場所は限らない。すべて五十人以上の人が
集会したなかには必ずこの紳士の立たちまじ交まじつていないということは
なかった。

見る時にいつも傍はたのもの人を誰かしらつかまえて、尻上りの、すま
した調子で、何かものをいっていなかったことはほとんど無い。
それに人から聞いていたことはかかつてないので、いつでも自分で
聞かせている。が、聞くものがなければ独ひとりで、むむ、ふむ、とい
つたような、承知したようなことを独ひとりごと言ごとのようではなく、聞か

せるようにいつてる人で。母様も御存じで、あれは博士ぶりというのであるとおっしゃった。

けれども鰯ぶりではたしかにない、あの腹のふくれた様子といったら、まるで、鮫あんこう鰾にに肖にているので、私は蔭じやあ鮫鰾博士とそういいますワ。この間も学校へ参観に来たことがある。その時も今被かむっている、高い帽子を持つていたが、何だつてまたあんな度はずれの帽子を着たがるんだろう。

だって、目金を拭こうとして、蝙蝠傘おとがいを頤おともで押えて、うつむいたと思うと、ほら、ほら、帽子が傾かぶいて、重量おもみで沈み出して、見てるうちにすつぽり、赤い鼻の上へ被かぶさるんだもの。目金をはずした上へ帽子がかぶさつて、眼が見えなくなつたんだから驚いた、

顔中帽子、ただ口ばかりが、その口を赤くあけて、あわてて、顔をふりあげて帽子を揺りあげようとしたから蝙蝠傘がぼったり落ちた。落^{おっ}こちると勢^{いきおい}よく三ツばかりくるくと舞った間に、鮫鱈博士は五ツばかりおまわりをして、手をのばすと、ひよいと横なぐれに風を受けて、斜めに飛んで、遥^{はる}か川下の方へ憎らしく落着いた風でゆつたりしてふわりと落ちると、たちまち矢のごとくに流れ出した。

博士は片手で目金を持って、片手を帽子にかけたまま、烈^{はげ}しく、急に、ほとんど数える隙^{ひま}がないほど靴のうらで虚空を踏んだ、橋ががたがたと動いて鳴った。

「母^{おっかさん}様、母様、母様。」

と私は足ぶみした。

「あい。」としずかに、おいしいなすつたのが背後うしろに聞える。

窓から見たまま振向きもしないで、急せきこ込んで、

「あらあら流れるよ。」

「鳥けだものかい、獣けだものかい。」と極めて平気でいらつしやる。

「蝙蝠こうもりなの、傘からかさなの、あら、もう見えなくなつたい、ほら、ね、

流れツちまいました。」

「蝙蝠ですと。」

「ああ、落ツことしたの、可哀相あはれに。」

と思わず歎息つぶやをして呟つぶやいた。

母様えみは笑えみを含んだお声でもって、

「廉れんや、それはね、雨が晴れるしらせなんだよ。」
この時猿が動いた。

九

一廻まわりくるりと環わにまわつて、前足をついて、棒ぼう杭ぐいの上へ乗つて、お天気を見るのであろう、仰あおむ向むいて空を見た。晴れるといまに行くよ。

母おつかさん様は嘘をおつしやらない。

博士は頻しきりに指ゆびしていたが、口が利けないらしかった。で、一散かに駈かけて来て、黙もくつて小屋の前を通ろうとする。

「おじさんおじさん。」

と厳しく呼んでやった。追懸けて、

「橋銭を置いていらつしやい、おじさん。」

とそういった。

「何だ！」

一ひととおり通

の声ではない。さつきから口が利けないで、あのふくれた腹に一杯固くなるほど詰め込み詰め込みしておいた声を、紙鉄砲ぶつようにはじきだしたものらしい。

で、赤い鼻をうつむけて、ひたいごし額にら越にらに睨みつけた。

「何か。」と今度はおうよう鷹揚である。

私は返事をしませんかった。それは驚いたわけではない、こわ恐か

ったわけではない。鮫鰈あんこうにしては少し顔がそぐわないから何に
 しよう、何に肖にているだろう、この赤い鼻の高いのに、さきの方
 が少し垂れさがって、上唇におつかぶさつてる工合といつたらな
 い、魚うおより獣よりむしろ鳥の嘴はしによく肖ている。雀か、山雀やまがらか、
 そうでもない。それでもないト考えて七面鳥に思いあたって時、
 なまぬるい音調で、

「馬鹿め。」

といいすてにして、沈んで来る帽子をゆりあげて行ゆこうとする。
 「あなた。」とおつかさんが屹きつとした声でおっしゃって、お膝の
 上の糸屑くずを、細い、白い、指のさきで二ツ三ツはじき落して、す
 っと出て窓の処へお立ちなすった。

「わたし
渡をお置きなさらんではいけません。」

「え、え、え。」

といったがじれったそうに、

「俺おれは何じやが、うう、知らんのか。」

「誰です、あなたは。」と冷ひやかで、私わたしこんなのを聞くとすつきり

する。眼のさきに見える気にくわないものに、水をぶっかけて、

天窓あたまから洗っておやんなさるので、いつでもこうだ、極めていい。

鮫鰯は腹をぶくぶくさして、肩をゆすつたが、衣兜かぶしから名刺を

出して、笊ざるのなかへまっすぐうやうやに恭しく置いて、

「こういうものじゃ、これじゃ、俺じゃ。」

といって肩書の処ゆびさを指した、恐しくみじかい指で、黄金きんの指環

の太いのをはめている。

手にも取らないで、口のなかに低声こごせにおよみなすつたのが、市内衛生会委員、教育談話会幹事、生命保険会社社員、一六会会長、美術奨励会理事、大野喜太郎。

「この方ですか。」

「うう。」といった時ふつくりした鼻のさきがふらふらして、手で、胸にかけた何だか徽章きしやうをはじいたあとで、

「分ったかね。」

こんどはやさしい声でそういったまままた行きゆそうにする。

「いけません。お払はらいでなきやアあとへお帰んなさい。」とおつしやつた。

先生妙な顔をしてぼんやり立ってたが少しむきになつて、

「ええ、ここまか、細いのがないんじやから。」

「おつりを差上げましょう。」

おつかさんは帯のあいだへ手をお入れ遊ばした。

十

母おつかさん様

ほうそをおつしやらない。博士が橋銭をおいて遁にげて

行くと、しばらくして雨が晴れた。橋も蛇籠も皆雨みんなにぬれて、黒

くなつて、あかるい日中ひなかへ出た。榎の枝からは時々はらはらと雫しずく

が落ちる。中流へ太陽ひがさして、みつめているとまばゆいばかり。

「母様遊びに行こうや。」

この時錶はさみをお取んなすつて、

「ああ。」

「ねえ、出かけたつて可いの、晴れたんだもの。」

「可いけれど、廉や、お前またあんまりお猿にからかつてはなりませんよ。そう可い塩梅あんばいにうつくしい羽の生えた姉さんがいつでもいるんじやありません。また落つちちようもんなら。」

ちよいと見向いて、清すずしい眼で御覧なすつて、莞爾にっこりしてお俯向うつむきで、せつせと縫つていらつしやる。

そう、そう！ そうだった。ほら、あの、いま頬ほつぺたを搔いて、むくむく濡れた毛からいきりをたてて日向ひなたぼっこをしている、

憎らしいツたらない。

いまじやあもう半年も経たつたろう。暑あたまさの取と着つつの晩方頃で、いつものように遊びに行つて、人が天窓あたまを撫なでてやつたものを、業ごうちく畜わる、悪巫山戯ふざけをして、キツキツと齒むを剥むいて、引搔ひつかきそうな劍幕けんまくをするから、吃びつくり驚おどろして飛退とびのこうとすると、前足まへあしでつかまえた、放はなさないから力ちからを入れて引張ひっぱり合あつた奮はずみであつた。左ひだりの袂たもとがびりびりと裂ちぎけて断ちぎれて取とれた、はずみをくつて、踏ふみ占しめた足あしがちようど雨上りだつたから、堪たまりはしない。石いしの上うへへ這すべつて、ずるずると川かわへ落ちた。わつといつた顔かほへ一ひと波なみかぶつて、呼い吸きをひいて仰向あおむけに沈しづんだから、面おもてくらつて立たとうとすると、また倒たふれて、眼まなこがくらんで、アツとまたいきをひいて、苦くるしいので手

をもがいて身体からだを動かすとただどぶんどぶんと沈んで行く。情なさけな
いと思つたら、内に母様の坐つていらつしやる姿が見えたので、
また勢いきおいづいたけれど、やっぱりどぶんどぶんと沈むから、どうす
るのかなと落着いて考えたように思う。それから何のことだろう
と考えたようにも思われる。今に眼が覚めるのであろうと思つた
ようでもある、何だかぼんやりしたが俄にわかに水ん中だと思つて叫ば
うとすると水をのんだ。もう駄目だ。

もういかんとあきらめるトタンに胸が痛かった、それから悠々
と水を吸つた、するとうつとりして何だか分らなくなつたと思
うと、※と糸ほつのような真赤まっかな光線がさして、一ひと幅はばあかるくなつた
なかにこの身体からだが包まれたので、ほつといきをつくつと、山の端はが

遠く見えて、私のからだは地つちを放れて、その頂より上の処ところに冷いものに抱えられていたようで、大きなうつくしい目が、濡髪をかぶつて私の頬ほん処ところへくつついたから、ただ縫すがり着いてじつとして眼を眠おぼえつた覚おぼえがある。夢ではない。

やっぱり片袖かたそでなかつたもの。そして川へ落おつこちて溺おぼれそうだったのを救われたんだって、母様のお膝ひざに抱かれていて、その晩聞いたんだもの。

だから夢ではない。

一体助けてくれたのは誰ですって、母様に問うた。私がものを聞いて、返事に躡ちゆうちよ躡ちゆうちよをなすつたのはこの時ばかりで、また、それは猪いのだとか、狼おだとか、狐きつねだとか、頬ほ白しろだとか、山雀やまぐさだとか、

鮫鯨だとか、鯖さばだとか、蛆うじだとか、毛虫だとか、草だとか、竹だとか、松まつ蕈たけだとか、湿地茸しめじだとかおいしいでなかつたのもこの時ばかりで、そして顔の色をおかえなすつたのもこの時ばかりで、それに小さな声でおっしゃつたのもこの時ばかりだ。

そして母様はこうおいであつた。

（廉や、それはね、大きな五色ごしきの翼はねがあつて天上に遊んでいろうつくしい姉さんだよ。）

(鳥なの、母おつかさん様。)とそういつてその時私が聴いた。

これにも母様は少し口くちごも籠かごつておいであつたが、

(鳥じゃあないよ、翼はねの生えた美しい姉さんだよ。)

どうしても分らんかった。うるさくいったら、しまいにや、お前には分らない、とそうおいであつたのを、また推返おしかえして聴いたら、やっぱり、

(翼はねの生えたうつくしい姉さんだつてば。)

それで仕方がないからきくのはよして、見ようと思つた。そのうつくしい翼のはえたもの見たくなつて、どこに居ます〜ツて、セツついても、知らないと、そういつてばかりおいであつたが、毎日々々あまりしつこかつたもんだから、とうとう余儀なさそう

なお顔色かおつきで、

(鳥屋の前にでもいつて見て来るが可い。)

そんならわけはない。

小屋を出て二町ばかり行くと、直ぐ坂があつて、坂の下口おりくちに

一軒鳥屋があるので、樹蔭こかげも何にもない、お天気の良い時あかる

いあかるい小さな店で、町家の軒まちやならびにあつた。鸚鵡おうむなんざ、

くるツとした、露のたりそうな、小さな眼で、あれで瞳が動きま

すよ。毎日々々行つちやあ立っていたので、しまいにやあ見知顔

で私の顔を見て頷うなずくようでしたつけ、でもそれじゃあない。

駒鳥こまはね、丈の高い、籠かごん中を下から上へ飛んで、すがつて、

ひよいと逆さかさに腹を見せて熟柿じゆくしの落おっこちるようにぼたりとおりて、

餌えをつついて、私をばかまいつけない、ちつとも気に懸けてくれようとはしなかった、それでもない。みんな皆違つてる。翼はねの生えたくつくしい姉さんは居ないのツて、一所に立つた人をつかまえちやあ、聞いたけれど、笑うものやら、嘲あざけるものやら、聞かないふりをするものやら、つまらないとけなすものやら、馬鹿だというものやら、番小屋の媽かか々に似て此こいつ奴もどうかしていらあ、というものやら。みんなもの皆獣だ。

（翼はねの生えたくつくしい姉さんは居ないの。）ツて聞いた時、莞にっこり爾笑つて両方から左右の手でおうように私の天窓あたまを撫なでて行つた、それは一樣ひらしやに緋羅紗ひらしやのずぼんを穿はいた二人の騎兵で——聞いた時——莞にっこり爾笑つて、両方から左右の手で、おうように私の天

窓をなでて、そして手を引あつて黙つて坂をのぼつて行つた。長靴の音がぽっくりして、銀の劍の長いのがまつすぐに二ツならんで輝いて見えた。そればかりで、あとは皆馬鹿にした。

五日ばかり学校から帰つちやあその足で鳥屋の店へ行つて、じつと立つて、奥の方の暗い棚ん中で、コトコトと音をさしているその鳥まで見覚えたけれど、翼はねの生えた姉さんは居ないので、ぼんやりして、ぼツとして、ほんとうに少し馬鹿になつたような気がする。日が暮れると帰り帰りました。で、とても鳥屋には居ないものとあきらめたが、どうしても見たくツてならないので、また母様にねだつて聞いた。どこに居るの、翼の生えたうつくしい人はどこに居るのツて。何とおいいでも肯ききわ分けられないものだから

母様が、

(それでは林へでも、裏の田圃たんぼへでも行つて、見ておいで。なぜツて、天上に遊んでゐるんだから、籠の中に居ないのかも知れないよ。)

それから私、あの、梅林のある処に参りました。

あの桜山と、桃谷と、菖蒲あやめの池とある処で。

しかし、それはただ青葉ばかりで、菖蒲の短いのがむらがつて、水の色の黒い時分、ここへも二日、三日続けて行きゆましたつて、小鳥は見つからなかった。鳥が沢山たん居た。あれが、かあかあ鳴いて一しきりして静まるとその姿の見えなくなるのは、大方その翼はねで、日の光をかくしてしまふのでしよう。大きな翼はねだ、まこ

とに大い翼だ、おおきつばさけれどもそれではない。

十二

日が暮れかかると、あつちに一ならび、こつちに一ならび、横縦になつて、梅の樹が飛とびとび々に暗くなる。枝々のなかの水田みづたの水がどんよりして淀よどんでいるのに際立つて真白まっしろに見えるのは鷺さぎだつた、二羽一とところに、ト三羽一とところに、ト居て、そして一羽が六尺ばかり空へ斜ななめに足から糸のように水を引いて立つてあがつたが音がなかつた、それでもない。

かわず蛙が一斉に鳴きはじめる。森が暗くなって、山が見えなくなつ

た。

宵月よいづきの頃だったのに、曇つてたので、星も見えないで、陰々として一面にももの色が灰のようにうるんでいた、蛙がしきりになく。

仰いで高い処に、朱の欄干のついた窓があつて、そこが母おつかさ様んのうちだったと聞く。仰いで高い処に、朱の欄干のついた窓があつて、そこから顔を出す、その顔が自分の顔であつたんだらうにトそう思いながら破れた垣の穴とこん処こに腰をかけてぼんやりしていた。

いつでもあの翼はねの生えたうつくしい人をたずねめぐむ、その昼のうち精神の疲労つかれないうちは可いいんだけど、度が過ぎて、そん

なに睨おそくなると、いつも、こう滅めい入いつてしまつて、何だか、人に離れたような、世間に遠ざかつたような気がするので、心細くもあり、うら悲しくもあり、覺おぼつか束つかないようでもあり、恐おそしいようでもある。嫌きらな心持だ、嫌きらな心持だ。

早く帰ろうとしたけれど、気が重くなつて、その癱しび神經しんけいは鋭とくなつて、それでいてひとりでにあくびが出でた。あれ！

赤い口をあいたんだなど、自分でそうおもつて、吃びっくり驚おどした。

ぼんやりした梅の枝が手をのばして立つてるようだ。あたりをみまわすまわと真ま暗くらで、遠くの方で、ほう、ほうツて、呼ぶのは何だろう。冴さえた通とる声こゑで野末のすゑを押おしひろげるように、鳴く、トントントントンとこだまにあたるような響こゑきが遠くから来きるように聞きえる鳥の

声は、梟ふくろうであつた。

一ツでない。

二ツも三ツも。私に何を談はなすのだろう、私に何を話はなすのだろう。鳥がものをいうと慄然ぞっとして身の毛が弥よ立つた。

ほんとうにその晩ほど恐こわかつたことはない。

かわず蛙の聲がますます高くなる、これはまた仰山な、何百、どうして幾千と居て鳴いてるので、幾千の蛙が一ツ一ツ眼があつて、口があつて、足があつて、身からだがあつて、水の中に居て、そして声を出すのだ。一ツ一ツ、トわなないた。寒くなつた。風が少し出て、樹がゆつさり動いた。

蛙の聲がますます高くなる。居ても立つても居られなくツて、

そつと動き出した。身体からだがどうにかなってるようで、すつと立ち切れないで踞つくばった、裙すそが足にくるまつて、帯が少し弛ゆるんで、胸があいて、うつむいたまま天窓あたまがすわった。ものがぼんやり見える。見えるのは眼だトまたふるえた。

ふるえながら、そつと、大事に、内証で、手首をすくめて、自分の身体からだを見ようと思つて、左右へ袖をひらいた時、もう、思わずキヤツと叫んだ。だつて私が鳥のように見えたんですもの。どんなに恐かつたろう。

この時、背後うしろから母おつかさん様がしつかり抱いて下さらなかつたら、私どうしたんだか知れませんが。それはおそくなつたから見に来て下すつたんで、泣くことさえ出来なかつたのが、

「母^{おつかさん}様！」といって離れまいと思つて、しつかり、しつかり、しつかり襟^{とこ}ん処へかじりついて仰^{あおむ}向いてお顔を見た時、フツト気が着いた。

どうもそうらしい、翼^{はね}の生えたうつくしい人はどうも母様であるらしい。もう鳥屋には、行^ゆくまい。わけてもこの恐しい処へと、その後^{のち}ふつつり。

しかしどうしてもどう見ても、母様にうつくしい五色^{ごしき}の翼^{はね}が生えちやあいないから、またそうではなく、他^{ほか}にそんな人が居るのかも知れない、どうしても判^{はつきり}然^ぜしないので疑われる。

雨も晴れたり、ちようど石原も^{すべ}迂るだろう。母様はああおつしやるけれど、わざとあの猿にぶつかつて、また川へ落ちてみよう

かしら。そうすりやまた引上げて下さるだろう。見たいな！ 羽
の生えたうつくしい姉さん。だけれども、まあ、可い。母様が
らっしやるから、母様がいらっしやったから。

明治三十（一八九七）年四月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成³」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第三卷」岩波書店

1941（昭和16）年12月25日第1刷発行

※疑問点の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：カエ

2003年8月30日作成

2005年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

化鳥

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>